

第一章 都城にあがる怒りの声

日記と写真もあつた南京大虐殺

悲惨さ写した三枚

宮崎の元兵士 後悔の念をつづる

朝日新聞に載つた七段ぬきの大見出し、そしてその上のほうには三枚の写真がついているのだが、その残酷な写真には思わず、どきつとさせられる。しかし写真もさることながら、文中の日記というのも、これまた読むにたえぬ強烈さだ。

「それぞれ色々な方法で殺して仕舞しまつたらしい。近ごろ徒然つれづれなるままに罪もない支那人を捕えて来ては生きたまま土葬にしたり、火の中に突つ込んだり木片でたたき殺したり」

と、残酷な描写びようしやが続き、この三枚の写真もそうした

「南京虐殺の際の写真」

だと、常々家族に語っていたという。その元兵士はすでに亡くなったのだが、生前この日記と写真を見ては思い悩み、死の直前にも、

「罪もない人間を殺した崇りで、こんな病になつてしまつた」  
そうもらしていた、とある。そして最後に、

「日本側からの証言、証拠が極端に少ない事件だけに、事実を物語る歴史的な資料になるとみ

られる」

そう、結んでいるのであった。

これを見た、ある中学生が、

「爺ちゃんたちは、悪い人間じゃねえ。戦争中こんなひどいことをしたんか」

と、声高こゝろだかに祖父をなじった。その日記や写真が発見されたという、同じ宮崎県下でのことであった。その子は、祖父が戦争中、南京作戦にも従軍したことを聞かされていたからである。

「何を言うか。爺ちゃんたちは、お国のために命を捨てて戦った、立派な人間ばかりじゃ。悪いことなど、なんもしておらん」

老爺も、思わず大きな声をだしてしまった。すると子供は、その新聞を突きつけ、

「そんなことあるかい、これ見い。こんなひどいことをしとるじゃないか。新聞は嘘つかんと、言いきった。」

爺ちゃんは、眼に入った大きなその見出しに戸惑いを感じながらも、とにかくその記事を読んでいた。そして、思わず唖うなってしまったのである。それには、都城二十三聯隊の元兵士とある。

これでは、孫がああ言うのも無理はない。しかし自分の知るかぎりにおいては、そのような事実はないし、そんな話は聞いたこともない。老元兵士は、新聞を前にして、次第に激しい怒りが

こみあげてくるのを、どうすることもできなかった。

これは、今から十年ほど前の昭和五十九年八月のことで、ロサンゼルスでは、オリンピックが華やかに開かれている、その最中<sup>さなか</sup>であった。

朝日の報道に激怒したのは、この老爺<sup>おやじ</sup>だけではなかった。宮崎県下はもとより、遠くに住む戦友たちからも、

「いったい、どういふことなんだ？」

と戦友会である、宮崎の二十三聯隊会事務局へ、怒りの問い合わせが相ついだ。そのような日記を書いた者など、いるはずもないのだが、とにかくこの真相を追及すべく立ち上がったのである。

まず現場の北郷村へ調査に出向いたのは、その時八十六歳という高齢の坂元<sup>ちかし</sup>昵氏と、事務局長の中山有良氏であった。二人は早速、その生存者数名に心当りをたずねたのだが、分らなかつた。しかし、

「北郷村出身の元上等兵で、四十九年に腎臓病で亡くなった人、そして職業は農林業」

というのだから、かなり焦点は絞られている。年金や恩給関係から、あるいはお寺の過去帳からと次々に当たっていったが、やっとのことでそれらしき人物を捜し当てたのである。ところがその未亡人は、

「日記なんかつけてはいませんでした。それに、写真機など持つような身分ではありません」と、言うのである。調査は行きづまってしまったが、とにかく幹部の人たちは、朝日新聞宮崎支局へと抗議に出かけることにした。

「日記の持ち主ですか、それは言えません。迷惑をかけることになりますから」

「それでは、何中隊と書いてありましたか？」

「そこまでは確認しませんでした。今度、見ておきます」

「新聞によると、その日記は一月一日から十二月三十一日まで、一年間一日も<sup>か</sup>缺かさず書いてあるというが、本当ですか？」

「そのとおりです。表紙はぼろぼろになっているし、白い紙も褐色に変じ、インクの色も変色しています。昭和十二年当時に、記載されたものに間違いないと判断しました」

これ以後も、激しいやりとりがあつたが、論議はかみ合わず、とにかく第一回の交渉を終えたのであつた。

聯隊会の人々は、誰しもがこう思っていた。

一、虐殺など、聯隊の誰も見ただこともないし、聞いたこともない。したがって、そんな日記などあるわけがない。あるとすれば、後になって誰かが意図的に書いたに違いない。

二、日々行軍と戦闘に明け暮れ、疲労の激しい兵隊が、毎日、日記を克明につけることなどあ

りえない。それでも聯隊会では、改めて日記をつけていた者がいたかどうか、またそれを見た者がいたかどうかを確認している。もちろん、その結果はすべて否であった。

三、それに鉛筆ならいさ知らず、インク書きとは不可解である。当時の万年筆は、インク瓶からスポイトでインクを入れるものしかなかったのだが、戦場にそうした道具を持ち歩くことなど考えられない。

四、ましてカメラなど、戦場に持ち歩くことなどありえない。将校でも、カメラを持っていた者は、聯隊の中に一人もいなかった。この辺のところは、当時の大隊長坂元昵氏や、中隊長吉川正司氏らが確認している。

今日では、カメラなどはごくありふれた日用品だが、戦前はいかなるような高級品であった。また万年筆とて、高価なものであったが、それを山間の僻地出身の、しかも貧しい青年が持っていたということ自体が、きわめて不自然なのである。

それに、鉛筆書きで、時折書き残していたメモくらいなら、多少の信憑性もあろうというものだが、一日も缺かさず、万年筆で書いた博文館の日記帳となると、それではまるで軍司令官の陣中日誌となってしまう。

それから、しばらくたつてのことである。ある戦友から、

「死亡の年月は違うが、同じ北郷村で、しかも上等兵だった宇和田弥一君というのがいた。彼が戦後思いついては書いていた日記ふうのものがあつて、それを聯隊史編纂へんさんの折に使つたことがある」

という話が、幹部にもたらされた。もちろん朝日の言うような、虐殺などの記述はまったくない。ただ二ヶ所を戦闘記録として載せたのだという。

朝日のいう日記なるものとはまったく違うが、何か妙な予感を幹部たちは抱いたのである。あるいはこれが、改竄かいざんを思いつくもとなつてはいないか、ということである。

記事の訂正を求めていた聯隊会と、朝日新聞宮崎支局との二回目の交渉が開かれたのが、記事が載つてから半年もすぎた、翌六十年の二月四日のことであつた。

その間も、さまざまな経過をたどつてはいたが、朝日は何としても記事の訂正には応じなかつたのである。ところがその日、支局長は、冒頭から、

「日記が本件のポイントだとのご指摘ですから、今日はその日記をお目にかけます」

と、言いきつた。聯隊会の代表五人は、これを聞いて色めきたつた。支局長は、後ろの柵からポリ袋に入っているものを取りだし、およそ五メートルほど離れたところへ行つて、そこで日記帳なるものを左右に開いて見せたのである。

聯隊会の一人が椅子から立ちあがり、そばへ寄ろうとすると、

「近寄つてはいけません。書体が分ると、誰が書いたか分りますから」

と、手で制する。しかし聯隊会の人々はいずれも高齢で、最年長の坂元氏は八十六歳であり、他の方々も七十代後半なのである。その人たちの眼では、それだけ離れただけでも、それが日記帳であるかどうか、それすら判別ができなかった。

日記とやらは、そうしてちらつと見ただけで終ってしまった、しかも日記の持ち主も明らかにならず、記事の訂正にも応じない。両者の話し合いは堂々めぐりで少しも進まなかったが、ただ日記の持ち主が、当初聯隊会が見当をつけた人ではない、という返答だけは得られた。すると残るのは、やはり宇和田元上等兵ということになるのだが、この場合死亡の年月が記事とは違っている。

些細なこととはいえ、記事のいう年月に亡くなった北郷村出身の元上等兵はいないのだから、こんなところからも、前記のカメラや万年筆のことと併せ考え、記事全体の虚構性がさらに強くなるのであった。

その四日後、都城二十三聯隊会は、その名において朝日新聞宮崎支局長あてに正式な抗議文を出した。記事の取り消しは、文書で申し入れてくれという支局長の発言を受けてのことであった。すると一週間ほどたった二月十四日に、今度は支局長から電話があり、

「今日ご来社願えますか。ただし、中山さん一人で来てください。他の人には聞かれたくない



相談がありますから」

と、いうことであつた。中山有良氏は聯隊会の事務局長であり、朝日との交渉の中心的存在でもあつた。一人とは妙な話だが、とにかく中山氏は支局へと出かけたのであつた。すると、支局長の応対は意外なほどの低姿勢で、

「抗議の文書確かに受け取りました。そのことですが、『お詫び』だけは勘弁してくれませんか。その記事を出せば、私は首になります」

「ほう。でも仕方ないじゃないですか。嘘の記事を、あんな大見出しをつけて全国版に掲載したんですから。責任をとるのは、当然でしょう」

「ええ、責任は重々感じています。しかし首になると困るんです。私の家族のために、助けてください。このとおりです」

と中村支局長は、両手をつけて頭を下げたのである。中山氏は困惑した。しかし、亡き戦友の名誉を守るという責務がある。記事を訂正し、そんな事実はなかつたということは、是非とも書いてもらわねばならない。

支局長の申し出は続いた。

「お詫びとか、記事取り消しという言葉は使わないが、都城二十三聯隊にはそのような虐殺などなかつた」

そういう趣旨の記事を、全国版と地方版に載せることで勘弁してほしい、と言う。彼は東京の  
本社から、相当てひどくやられたのかもしれない。

やむなく中山氏はそれに合意した。だが実際には合意というより、彼の家庭にまで悲劇が及ぶ  
のはしのびないと思ひ譲歩したのであった。そして安楽秀雄会長ら幹部も、それを了とした。

あの虐殺記事がでてから、すでに半年もたっていたが、この約束によつて、ともかくにも朝  
日新聞に大略次のような記事が載つたのである。

「都城二十三聯隊会の代表は、宮崎支局を訪れ、同聯隊は南京大虐殺とは無関係であつたと表  
明した。同会で調査した結果、事件に係した証言はえられなかつたとしている」

これでは、いかにも虐殺は、他であつたかのような書きかたである。それに、朝日自身の責任  
にはまつたく触れていない、というのも妙だ。

しかし、聯隊会の人々はやむなく、これで我慢せざるをえなかつた。地方の小さな戦友会にと  
つて、朝日という巨大な組織の壁はあまりにも厚い。訂正や謝罪の記事など、一蹴されてしまえ  
ばそれだけのことで、それ以上にはいかんともなしがたい。

ところが、である。この追加記事は宮崎版だけで、約束の全国版には載っていないことが分つ  
たのである。支局へ出向いた中山氏がそれを質すと、中村支局長は、言う。

「全国版ですか？ それには載せていません」

「えっ……。それでは約束が違うじゃないですか」

「そんな約束をした覚えはありませんよ」

「何を言ってるんです。あの日、あなたは頭を下げ、堅く約束をしたじゃないですか」

激しい怒りを感じながらも、中山氏はそれをぐっと押さえた。そして責任を思い、これからでも全国版に載せてくれるようさらに頼んだが、中村支局長はそれを無視した。

「あれは、訂正記事ではない。ただ聯隊会から抗議があつたことを載せただけです」

と、開き直つたのである。そして、訂正記事など出す必要はない、とばかりに、

「あの記事はすべて正しい。南京虐殺については、西部本社、東京本社ともにこの問題を専門にしている記者が本多勝一氏はじめかなりいる。そうした記者とも相談し、資料とも突き合わせ書いた。創作やでっち上げではありません。事実です」

と、言いきつたのである。

とにかく約束は反古<sup>ほご</sup>となつた。それでも中山氏はなお一度、これからでも全国版に載せれば、この件は終りになるかと念を押ししたのだが、支局長は答えなかつた。

「しかし、あなたは卑怯<sup>ひきょう</sup>ですね。あの時私に、一人で来てくださいと言われた意味が、これによく分りました」

中山氏は惘然として席を立つた。昔気質<sup>かたぎ</sup>の人々にとって、たとえ口約束であっても、男どうし

の約束の意味は大きい。

これでは聯隊会の人々の怒りが、再燃するのも無理はなかった。だがその怒りを汲んでくれたかのように、今度はよき援護射撃が入った。それは、世界日報の記事で、

「虐殺の様子から本人の苦惱、それに家族や識者の談話まで載せているが、調査の結果捏造記事であることが判明した」

と、いうのである。さらにこれに続き、朝日が記事とともに、その証拠として載せた残酷な写真について、それはまっかな偽ものだとすっぱぬいたのである。

「朝日、こんどは写真悪用、南京虐殺事件をねつ造。南京大虐殺の動かしがたい証拠だとしたこの写真は、昭和六年ごろ朝鮮や南満洲で市販されていたもので、中国軍が満洲の鉄嶺で捕らえた馬賊を処刑した時のものと判明した」

と、ある。

これはその当時、朝鮮の最北国境付近にある会寧というところで売っていたもので、これを国境警備隊にいた佐藤進氏（藤沢市在住）らが買い、日本へ持ち帰っていたのだが、写真には、

「鉄嶺にて銃殺せる馬賊」

と刷りこまれている。その刷りこみされた文字の部分を切りとって、南京虐殺の写真としたわけである。

こうなると、これを今度は雑誌社などが取り上げ、文藝春秋、週刊新潮、正論などが、次々と朝日の捏造報道を記事にしていたのである。

聯隊会のような地方の小団体がいかに抗議したとて、それを無視することはできる。しかしこれだけ有力誌に次々と書かれては、さすがの朝日もこのまま押し通すわけにはいかぬ。それはともかく、この頃から、朝日の聯隊会にたいする態度も一変した。以前から、

「他のマスコミ関係者には、この話はしないでほしい」

という中村支局長の申し出であったが、朝日がそれをいかに恐れていたかを、このころから実感されたのだが、形勢不利とみるや、威丈高な態度が急に鄭重ていちょうになるというのも、人間としていかなものか。

そして同時に、朝日からは聯隊会に和解の申し出が何回となく電話で入っていた。これには、不買運動の動きがあることも影響していたかもしれぬ。やはり「株式会社朝日新聞」としては、たとえ一部の地域といえど、新聞が少しでも売れなくなるということは恐ろしいことに違いない。だが聯隊会では、記事を撤回しなかり和解はありえない。それどころか会員の怒りは少しもおさまらず、ついに六百余の戦友たちが集まり、

「朝日新聞粉砕総決起大会」

を開くに至った。あらぬ汚名を着せられた怒りが、いかに激しいものであったかということだ

が、ここで、

「日記の公開と記事訂正、そして謝罪」

とを要求し、それが容れられぬ場合は、告訴と不買運動にふみきることを決意したのであった。だが、それでも朝日は日記の公開をしぶった。それはそうであろう。これが世間に知れ渡ったら、今まで力を入れてきた「南京大虐殺」のキャンペーンが、根底から揺らいでくるからだ。

だが、形勢はいかにも不利、やむなく朝日はその非を認め、昭和六十一年一月二十二日ついに全国版にお詫びの記事をだしたのであった。

「写真三枚については、南京事件当時のものではないことがわかりました。記事のうち、写真に関する記述は、おわびして取り消します」

新聞の活字で、わずか五行である。しかもその前には日記は現存するとあり、聯隊会のことまで含めて、一段十四行、しかも社会面の前の頁の、それも最下段の片隅に、小さく載っているだけなのである。これでは、いったいどれだけ読者の眼にふれるというのか。

とすれば、一般の読者はあの虐殺を事実として報じた大きな記事のみが、強く印象として残っていくに違いない。したがって、たとえお詫び記事をだしたとて、朝日の目的は充分達成されたわけだ。

それに、この場合写真に刷りこみがあつたり、写真の持ち主がいたり、明確な証拠があつた

からいいようなものの、おおかたの場合、嘘だということを証拠だてることはきわめてむづかしい。それはほとんど、不可能といつていいだろう。

とにかくお詫びを出すなら、その写真や記事と同じくらいに大きく掲載してもらいたいものだ。それでも、前の記事を読んだ人すべてが訂正に気づくとはかぎらないのだ。

なお中国側は、今日でもなおかつこの写真を「南京大虐殺」の証拠品として、中国全土に配布しているのである。

こうして写真のほうは、決着がついた。だが日記は本物だと、なおも朝日は突つ張る。しかし本来、写真と日記はともに一心同体で、その兵士が写し、かつ書きつづつたものだ<sup>ほこさき</sup>と強調したのではなかったのか。聯隊会の人々は、そう言われては鋒先をおさめるわけにはいかない。

「何としても汚名を雪がねば、亡き戦友に申し訳がたぬ」との思いに、かられているのである。ではその日記なるものは、いったいどのようなものであったのか。あの時、読みあげられた箇所の幾つかをあげてみよう。

昭和十二年七月二十七日

「午後三時、突如師団からの電報により動員下令。将校集合のラツパ。週番司令から各中隊週番士官に通達された」

この読みあげられた日誌の一部について、聯隊会の幹部の一人吉川きつかわ正司氏は、文藝春秋の六十二年五月号でこう反論している。吉川氏は南京戦当時の中隊長であり、以後は師団、軍の作戦参謀などをつとめた人である。

「上等兵が、どうして師団から電報がきたことが分るのか。それに、午後三時とあるが、その時刻には将校は全員在営しているから、命令は聯隊長から直接将校へと下すはずだ。週番司令というのは、五時、聯隊長の帰営後に警備のため勤務するもので、動員令などの重要な命令を傳達する権限などはない」

と、述べているが、そう言われれば素人でもなるほどと合点がゆく。どうみてもこれは見当違いもなはだしい。確かにこれは、上等兵がつけた日記ではない。

十一月四日

「…(不明)…の命により、軍は上海南方八十里の…(不明)…地区にまず第五師団をもって敵前上陸を敢行。F第一線を占領し……」

「これもまた、一兵卒が知りうることではない。二十三聯隊は第六師団に属していたが、このほかどの部隊が来ているのかなど、中隊長の私でさえ知らなかった。昭和四十九年に日本軍の公刊戦史を見て、その時はじめて第五師団の国崎支隊が来ていたことを知ったのである。それを、



一上等兵がその日の日記に書くことなどありえない。さらにFというのは、将校が図上演習のおり用いる略語で、敵を意味している」

つまり下士官、兵はFなる記号についてはまったく知ることはなかったというのだ。これと同じようにつじつまの合わぬことが、以下連続なのである。中でも決定的なのは、

「虐殺の日々が続いたという十二月二十一日以降は、宇和田氏の所属する第一中隊は、南京城内の警備にあたっていて、虐殺現場という南京城の西方にはいない」ということだ。

これでは、この日誌なるものが宇和田元上等兵が書いたものでないことは明らかだ。第一回氏が戦後に書いた回想的な日誌は、戦友たちが見ているのだ。その時は、そんな記事はもちろん記入されていない。虐殺に関する記入など、まったくなかったのである。

そして戦史編纂へんさんのうちに、この中から採用された二ヶ所を確かめるため、聯隊会の人がある日を指定し読みあげてもらったのだが、その部分は中村支局長が読みあげたものと、ぴたりと一致する。これで朝日という実在する日記なるものが、宇和田氏のものを元として、それに空白部分を記入したものであることがはっきりとした。

あとは、その日記を見せてくれれば、筆跡により宇和田氏記入の部分と、誰かが記入した部分との違いがはっきりとする。宇和田氏の筆跡は、戦友がもらっている手紙があるし、照合は簡単

だ。これでは中村支局長が日記を遠くからしか見せないというのもよく分る。筆跡が所によって違うのが分つたら、すべてが明白になってしまうからで、朝日が日記を見せられないのも当然であつた。

宇和田氏のその日記なるものが、紛失後いかなる経緯<sup>けい</sup>で朝日の手に入ったかは知る由もないが、ではいったい誰が空白の部分を記入していったのか。それはある程度軍隊にたいする知識がある者、ということになる。しかし実際に軍隊経験があるか否か、はなはだ疑問である。

以後も朝日の対応を見守っていた聯隊会の幹部たちは、もしや朝日がその日記を焼却してしまうのではないかと恐れた。証拠品が失われては、たとえ告訴しても論争は不毛のものとなるからである。そこで幹部は、

「日記の保全と公開」

とを、小倉の簡易裁判所に申し立てをしたのである。舞台が小倉になったのは、日記はすでに宮崎支局から西部本社へと移されていることを知っていたからである。四ヶ月後に出された判決は予想どおり、聯隊会の主張をほぼ認めたものであつた。

「問題は残虐行為の部分であるから、その十二月十五日から二十八日までを写真にとらせるように」

と、朝日側に言い渡したのであつた。

「今度こそ、すべてが明らかにできる」

と、聯隊会の人々は喜んだ。筆跡を照合すれば宇和田氏の部分と、書きこまれた残虐行為の部分とが、はっきりと区別できることになるからだ。しかし朝日側はなおもねばり、今度は福岡地方裁判所小倉支部に、抗告の手続きをとったのである。本裁判にかけ、時間かせぎをしようという引きのぼし作戦にでたのであった。

これには、聯隊会の人々は困惑した。この時の状況を、吉川氏は文藝春秋でこう記している。

「我がほうの状況は、責任者の坂元ちかし昵氏が八十八歳、最後の聯隊長だった福田環氏が八十九歳、比較的若い私でも七十三歳という高齢である。これから先、何年続くか分からぬ裁判に、どれだけ皆が頑張りとおせるか。実際坂元氏は心労のあまり昨年暮れに入院し、私もまた酒の力を借りなければ眠れぬ夜が続いた。酔って寝ても夜半に目が覚め、やがて睡眠薬を飲むようになっていた」

という、まことに気の毒な状況にあった。

「さらに高齢にくわえ、金銭上の問題もあった。老後のためのわずかな貯えを、これ以上皆に放出させるは忍びない。裁判には、かなりの金がかかる。朝日はおそらく、露骨な引きのぼし作戦に出てくるだろう。判決まで十年はかかる。それまでわれわれの余命があるのか。あれこれ考えると、今後裁判をたたかい抜く見通しがたたない。私は、一件の終焉しゅうえんを考えざるをえなくな

った」

まことに、胸打たるるものがある。坂元氏は祖先伝来の田畑でんぱたを全部売り払っても鬪うとまで言いきった。だが、周囲の人はそれをさせるわけにはいかない。老境にある人々の無念の思いが、短い文章の中から切々として伝わってくる。

吉川氏は、朝日の人々と話し合い、都城二十三聯隊は、虐殺には関係ないという一文を全国版に載せることを条件に、和解しようと考えたのである。聯隊会の人々も、状況からして涙をのまざるをえなかった。

吉川氏の和解案を、朝日は待つていたかのように受け入れ、何と翌日にはその小文をのせ、同時に聯隊会がするはずの告訴取り下げの書類まで取りに来て、その日のうちにすべてをすませってしまったのである。

記事捏造ねつぞうが発覚するのを、いかに朝日が恐れていたか、こうした間髪を入れぬ素早い行動も、それをよく物語っている。だが、とにもかくにも、二年五ヶ月の長きにわたる朝日との闘いは終わったのであった。そして年余の後、その吉川氏は亡き人となられた。

「資金面より寿命のことで告訴は断念せざるをえず、その心理的重圧が吉川様を死に至らしめ、私の脳梗塞を引き起こしたものと考えられます」

これはその後、年余の長い療養生活を送ることになった中山有良氏の述懐である。内容を分り

やすくするため、ほとんど省略せざるを得なかったが、坂元氏や中山氏など幹部の人々の東奔西走、その心労の様、経済的な負担など、実際何とも慰めの言葉もない。

世の中をより良くするために、与えられた報道の自由なるものが、たった一握りの心なき人々のために、こうして歴史が歪められるのみならず、多くの人々を傷つけ、損害を与える凶器となつてゐるのだ。

ではさらに、南京事件なるものの実態を明らかにするため、攻略戦そのものから見えていくことにしよう。



第二章 南京城総攻撃始まる

昭和十二年十二月 南京城数キロの地点に迫つた日本軍は、ここにその包囲の態勢を整えた。中支那方面軍司令官 松井石根大將は、ここにおいて南京の衛戍軍司令官唐生智將軍にたいし、降伏の勧告をおこなつたのである。

日軍百万すでに江南を席卷せり。南京城内まさに包囲の中、交戦ただ百害あつて一利なし。惟うに江寧の地、中国旧都にして、また民国の首都なり。明の孝陵、中山陵等、古蹟名所蟻集し、宛然、東亜文化精髓の感あり。

日軍無辜の民衆、敵意なき軍に、寛大をもつてこれを冒さず、東亜の文化これを保護するの熱意あり。しかるに交戦を継続するや、戦禍免れ難く、千載の文化灰燼に帰し、十年の経営泡沫とならん。

よつて日軍を代表し、貴軍に勧告す。南京城を平和裡に解放し、しかして左記の処置をとられたし。

大日本陸軍總司令官 松井石根

降伏勧告文とはいえ、なかなかもつての名文である。陸軍きつての中国通といわれ、漢詩もよくする松井大將ではあるが、それにしても重厚かつ迫力充分な文章である。冒頭にある日軍百万というのは、もちろん漢詩的な表現であり実数とは関係ない。この時の日本軍の総数は、その十



分の一にも満たぬほぼ七万五千程度であった。

漢語の表現は、このように何事においても大仰おおぎょうなのが特徴だが、その迫力をだす効果としては確かに抜群である。日本人の書いた文ですら、漢詩調ともなればこのようないいまわしを使うことになるのだが、ましてこれが中国人ともなると、文はもちろんのこと、会話にいたるまでが万事大袈裟おおげさで、しかも彼らはそれを当然のことと受け止め、何の違和感も持っていない。

この辺のところは、中国人と関わり合いをもつ場合、充分なる注意が必要である。まして形容を事態と思ひこんだらとんでもないことになるし、別に悪意のない場合でも、話とはかく針小棒大、それが中国流なのだということをよく承知しておかないといけない。

それはともかく、文中には非戦闘員である一般民衆の安全と、文化遺産にたいする配慮が強くにじみでているが、これは決して単なる文章的な空文句からかではない。というのは、松井石根は若いころから孫文や頭山満の提唱する大亜細亜主義あじあに共鳴し、孫文やその継承者たる蒋介石とは、かねてより親交のあった人物だったからである。

もつともこれは独り松井のみならず、白人を排しアジア人によるアジアを創つくろうとする思想には多くの日本人が共鳴していたのである。特に頭山満などの在野の士、犬養毅などの政治家、それに軍人などがそうで、孫文の革命が成就したのもこれら日本人の力に據よるところが大きかった。松井石根などは、そうした古き良き時代を充分に経験してきた將軍の一人だったということだ。

またそうした親中国的な將軍を派遣軍の司令官に任じた陸軍中央部の苦衷も、また察することができようというものである。

しかも松井と蔣介石とは年来の友で、前年にも松井は南京を訪れ、蔣介石と親しく懇談している。それがこうして一年後には一転して互いに干戈を交えねばならぬというのは、まことにもつて皮肉な廻り合わせであつた。だがそれだけに、民衆や文化財にたいする配慮などは、松井の心情をそのまま現わしたものであつた。

また、この作戦に旅団長として参加している佐々木到一少将は、中佐時代軍事顧問として蔣介石の北伐を援けている。したがつて蔣介石とこれまた親しく、中国をもつともよく知る軍人の一人であつた。そしてその私記抄はこう記している。

南京城頭に立つて、最も感激を深うしたる第一人者として、予は自分自身を確認することが出来る。それは、二年半の間駐在した旧知の地であるがためばかりではない。実に予が弱冠の明治四十四年以来、滿洲問題解決を目標として密かに国民党に好意を表しつつつづけていた夢が、彼らの容共政策のため、殊に蔣介石の英米依拠の政策によつて、日本との關係を絶つて以来その夢が破れ、排日侮日のさ中であつてつぶさに不快をなめ、皇軍の前途を憂いて憤然ここを去つた、昭和四年夏の想い出がまざまざと甦つてくるからであつた。

「今に見よ」これは私憤ではない。信義を裏切る者には後日必ず天譴を下さねばならぬ。これが爾來、予の固き信念となつたのである、紫金山の中腹に眠る孫文の靈は、蔣介石らの短見にさぞかし口惜しき涙をふるつてゐるであらう。

ここにも、当時の軍人の心境がよく現われているのだが、今日ではこうした歴史の一面はまったく語られることがない。排日毎日が起こつたには、それなりの理由はあるにしても、少なくとも大正の時代には、軍人の多くは親中国であり、中国の意向は充分尊重されていたということである。歴史の変遷は決して単純ではない。幾重にも織りなす真実が語られてこそ本来の姿に接することができよう。

だが、こうした松井の心情を吐露したともいうべき降伏勧告は南京の守将唐生智によつて無視され、ここに十二月十日、全軍に総攻撃の命が下される。包囲する日本軍は、二個軍団、九個師、七万五千の兵力であり、たいする中国の守備軍は、およそ五万、城内ならびにその周辺にある紫金山、雨花台などの要衝にたてこもつていた。なお、日本軍の編制は次のとおりであった。

中支那方面軍

軍司令官

松井石根大将

参謀長

塚田 攻少将

参謀副長

武藤

章大佐

上海派遣軍

軍司令官

朝香宮鳩彦王中將やすひこ

名古屋

第三師団

師団長

藤田 進中將

金 沢

第九師団

師団長

吉住良輔中將

善通寺

第十一師団

師団長

山室宗武中將

仙 台

第十三師団

師団長

荻洲立兵中將

京 都

第十六師団

師団長

中島今朝吾中將

東 京

第一百師団

師団長

伊東政喜中將

第十軍

軍司令官

柳川平助中將

熊 本

第六師団

師団長

谷 寿夫中將

久留米

第十八師団

師団長

牛島貞雄中將

宇都宮

百十四師団

師団長

末松茂治中將

広 島

第九旅団 (第五師団)

旅団長

国崎 登少將

九個師団と一個旅団、これが南京攻略作戦に参加した全兵力であった。しかし、上海派遣軍のほうは、上陸以来相次ぐ激戦で消耗激しく、補充もままならぬ状況であったから、定員を大きく下廻っていた。

さらに十三師団は、途中から主力が北方に転じたため、一個聯隊のみ参加というように、かならずしも兵力はそろっていない。こうしたことから、結局実数としては、七万余というのが実情であった。

一方、中国軍のほうはどうかというと、五万弱というのがおおかたの見方である。当初は十万とも言われていたのだが、後に分ったことだが、包圍以前に相当数の兵力が、すでに漢口方面に撤退していたということで、これらからして結局五万弱であったというのが、おおむね妥当な数だとされている。

そして十二月十日、ついに総攻撃となったのだが、城壁にたどり着くまでには、城外に紫金山<sup>うか</sup>雨花台という要衝があり、これらを抜かなければ南京城へは迫れない。紫金山は南京のすぐ東にあり、三百メートル程の重<sup>ちゅうじょう</sup>畳たる小山が連なり、そこにはペトン（コンクリートのこと）で固められた堅固な陣地が構築されている。

南にある雨花台とて同じで、入り組んだ台地には、ドイツ軍指導のもと構築された堅陣が南京城への道をはばんでいる。これらに挑んだ師団はもちろんのこと、それ以外の師団も、広大な地

域に稀薄な兵力をもつての包囲戦であるだけに、どこも苦戦激闘の連続となった。

虐殺はあつた、いやなかつた、と外側で論議をするよりも、まずこの作戦に参加された方々の言に耳を傾け、いわゆる『南京大虐殺』に関与したとされる三つの師団の行動を主体とし、また戦史と多くの手記を元として、事実のみを追い求めていくほうが早い。そして何よりも、それが本来あるべき姿だと信ずるからである。そこから結論は自ずとして得られる。

第三章 第六師団の激戦

第六師団は、九州の中部、南部の現役兵で編成された日本有数の精鋭師団であった。司令部は熊本である。この第六師団は南京を南から攻めたのだが、南京の手前には小高い丘、雨花台<sup>うか</sup>一帯の要害があり、激戦の連続となった。

また最左翼は、南京と揚子江の間の湿地帯を北進したが、ここは城兵の退路にあたるため、大軍を相手の激しい戦いとなった。

その編制を、北上の配置どおり並べると次のようになる。

第六師団 師団長 谷寿夫中将

歩兵 十一 旅団 坂井徳太郎少将 熊本 歩兵 十三 聯隊

大分 歩兵 四十七 聯隊

歩兵 三十六 旅団 牛島 満 少将 都城 歩兵 二十三 聯隊

鹿児島 歩兵 四十五 聯隊

ここでも、そのすべての戦闘を再現するわけにはいかないが、その幾つかをつづつてみよう。



## 一 三明中隊の南京城突入

眼の前には、きり立つ城壁があつた。そしてその手前には、深い濠がある。もちろん橋は、すべて焼き払われていた。城壁の上には、遮蔽された無数の重機、軽機が配置されちよつとでも動けばたちまち弾が飛んでくる。

こうした絶対優位の前におかれては、身動きすら容易ではない。やはり砲撃によつて、城壁の一部を破壊し、また多くの銃座を沈黙させなければ、いかんともなしがたい。ところが、野砲弾が当たっても、この古い城壁はびくともしないのであつた。次々と命中弾があつても、その轟音と閃光はすさまじいのだが、積み重ねた煉瓦の表面をわずかに削りとるだけであつた。それは、まことに予想外の堅固さだったのである。

大分四十七聯隊の第三中隊長、三明保真大尉は、そんな状況をじつと物陰から見つめていたが、とにかく渡河準備を整えるべく、架橋隊の編成を命じた。だが、工兵ならぬ三明中隊には、急造の竹梯子があるだけで、その梯子の上に、近くの学校から運んできた板戸を並べたて、その上

を一気に渡つてしまおうというのである。

架橋隊が梯子はしこを持って飛び出すと、同時に中隊の猛烈な援護射撃が始まった。だが、巧みに遮しゃ蔽へいされた城壁上の銃座からは、これまた激しい応射があり、走る架橋隊の周囲には、たちまち弾雨が集中した。そんな中を、濠に身を躍おどらせた隊員は、梯子を水の上に浮かべ、それを押しながら必死に泳いでいく。

だが、隊員は一人、二人とやられそのまま早い流れの中に呑みこまれていった。岸边の物陰から、それをじつと祈るように見守っていた中隊の兵士たちは、ただ無念の思いで唇を噛みしめるだけであった。そしてついには、梯子ごと下流へと流されてしまったのである。

次の架橋隊が、再び挑戦する。しかし、結果はほぼ同じことになった。状況は完全にゆきづまっていたが、思いもかけぬ幸運が舞いこんだ。なんと、上手のほうから一隻の小舟が流れてくるではないか。

「誰か、あの舟をとってこい」

思わず、三明大尉は叫んだ。橋は早くから落とされていたし、それは敵が連絡用に使っていた小舟だったのである。

「自分が、行ってきます」

すぐ近くにいた見酉みと公夫上等兵が、そう言って立ちあがり早くも服を脱ぎはじめた。そして

禪ぜんひとつになると、ぱつと駆けだしていく。嚴冬期の濠には、文字どおり身を切られるような冷たさがあつたが、今はそれを感じとる余裕もない。

「頑張れよ、見西」

岸辺の隊員は、誰もが心の中でそう叫んでいた。幸いにも見西は小舟にたどり着くと、それを押しながら少しずつ岸辺へと寄ってくる。大分流されてはいるが、それでもどうにか小舟を自陣の岸辺へと着けることに成功したのであつた。

砲兵は相変らず命中弾を城壁に送りこんではいたが、依然として突破口は開けない。十一時までは、砲兵が城壁の一部を破壊し、そこから城内へ突入する、というのが当初の作戦だつたのである。だが城壁の堅固さは、その計画をすっかり狂わせてしまった。

砲煙は天地をおおい、城壁直前まで進んできた各部隊は、いずこも攻めあぐみ、戦線は完全に膠着こうちやく状態におちいつてしまった。三明中隊も、進むことも退くひくこともできなかつた。このままでは、中隊は自滅しかねない。ことここに至つて、三明大尉は断を下した。

それは、決死隊で突っこむことであつた。もとより成否のほどは、まったく分らない。だが座して死を待つよりは進むに如かずである。この決意に、隊員のすべてが賛意を示した。そして全員が決死隊へ志願したのだが、三明は、その中から六人を選んだ。

六人の隊員は、滑らぬように軍靴を地下足袋ちかたびにはきかえた。そして着剣した小銃を背に負い、二人ほどは日の丸の旗を銃身にしっかりとくりつけた。城壁の上にたどりついたら、まずこれを振りたかったのである。それは、文字どおり南京城突入の旗印であった。用意を整えた六人の前に、三明大尉はわずかに残った水筒の水で、別れの杯を交した。送る者も、送られる者も、生きて再びあいまみえることはない、と思つた。

再び中隊は、猛烈な援護射撃にはいつた。同時に六人の隊員は、二つの梯子を手にとると、素早く小舟へと駆け寄つた。もちろん弾雨は、隊員らの周囲に集中したが幸運にも、それはまったく幸運としかいいようがないほど、一人も倒れることなく小舟へ乗り移り、そして対岸へ着くときができたのである。

城壁の真下へたどり着けば、城壁上の銃座からは死角となる。だが濠のへりには、城外の銃座がところどころ置かれていて、そこからの射撃は、依然として激しいものがあつた。ただ、少し距離があるのが幸であつた。

二本の竹梯子は手早くつながら、城壁にかけられると、粟津定一等兵がまず梯子にとびついた。次いで安東康文軍曹が、その後が続く。登るにつれ、梯子は次第に揺れが激しくなり、登りにくくなつていった。

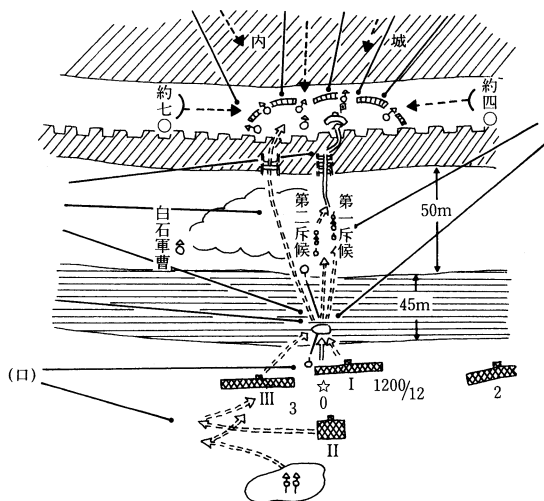
「あつー」

と、粟津一等兵が声をあげると、中ほど近くまで登っていた梯子から転げ落ちた。一瞬、安東軍曹も思わず梯子にしがみついたが、彼の身を案じている暇いとまはなかった。また安東は一段一段と登っていく。射撃は相変らず激しく、梯子を登る隊員に集中している。それでも安東軍曹は、ついに梯子の先端まで登りつめたが、残念ながら城壁の上には届かない。

対岸で見守る中隊の兵士たちも、一瞬絶望的な気分に追いやられた。だが安東は、煉瓦の周囲をほじくると、その煉瓦を抜きとり、そこを足場として、その上にある小さな雑木に手をかけた。葉を落とした雑木には、つたかずらが絡からみついていたが、それがどれほどの強さをもっているのか、皆目かいもく分らない。だが今は、それに賭かけるほかなかったのである。

こうして、次々と足場を作っては、一段一段と登っていく。そして、とうとう城壁のへりに手をかけた安東軍曹は、一気に上へと躍りこんだのである。まさか梯子で上まであがってくるとは思ってもいなかっただけに、敵兵には油断があった。これが幸いした。実際、日本軍の砲撃は続いているし、それに破壊口でも開けぬかぎり、突入はありえないというのが、一つの常識でもあった。でなければ、自軍の砲弾でやられるかもしれないのだ。

近くにいた敵兵は一瞬虚をつかれたが、それが日本兵だと分ると、たちまち格闘戦となった。さらに、次々と梯子を登ってきた四人の隊員も、押し寄せてきた敵兵を迎えすままい白兵戦に入った。銃を射つ余裕すらない。しかし何といつても多勢に無勢、安東軍曹は手榴弾の破片と、チ



第三中隊戦闘經過要図 (三明正一氏提供)

エコ銃のため射ちを浴び倒れ、真鍋彰一、寺山勝児、江口寿次の各一等兵も敵中に倒れていった。

ただ一人残った中津留大作伍長は、掩体えんたいの中に飛びこむと、そこに据えられていた機銃を大きく廻し、敵を薙なぎ倒していった。これにひるんだ敵が、物陰に姿をかくしたその瞬間、中津留は銃をとり、ついている日章旗を大きく二度、三度と振ったのである。これを見た中隊の主力、そして隣接する他の部隊からも、どっと、どよめきが湧いた。

時に、昭和十二年十二月十二日、十二時二十分であった。

中津留伍長が、その日の丸を振った時、すでに祥雲通弘伍長ら第二隊が梯子を登っていた。だが祥雲伍長も、また続く隊員も、次々と倒れ、また傷ついていった。しかし、日の丸を機に中隊の主

力もどつとくりだし、状況は完全に転換していた。幾つもの梯子はかけられ、兵士らは続々と登っていく。

そして、先着の兵士らは戦いながらも、麻繩をおろし、重機、軽機を吊りあげていった。

三明中隊は、この南京城一番乗りの功により、軍司令官柳川中将から感状を授与されたのだが、前記の図もその感状輯録しゅうろくに付されていたものである。

三明大尉は、その後もずっと中国戦線にあつて、中佐で終戦を迎えた。途中一年ほど内地勤務があつたものの、前後七年にわたつて中国で従軍したわけだが、その間激戦が多かつただけに、幾度か重軽傷を負つている。

聯隊随一の戦上手と、勇猛さで知られた三明大尉とその中隊ではあつたが、普段の三明大尉はその性、実に温厚、しかも無口で、父母に孝養をつくすのを人の道と心得、それを実践したというのだから、やたらに勇猛一方の人間ではなかつたようだ。

出身は大分県の国東半島くにさきにある豊後高田という小さな町だが、このあたりは野山に散在する石佛でよく知られているところだ。実に素朴で飾りけのない、無邪気な顔をした佛像が、今日見直されているのだが、それはそのまま、往年のここ国東の農民たちの姿そのものであり、またその信仰心厚きことをよく物語つてもいる。

しかも、貧しい農家であった三明少年の家は、国宝富貴寺と背中合わせの山麓にあったというのだから、よりいっそう佛さんとは縁が深い。とにかくそうした素朴で、善意あふれる民情の中で三明少年は育てられたのだが、これが両親の豊かな愛情とともに、少年の情緒安定に大きな役割を果たしたことは容易に察しがつく。

今の世には最も欠けたものだが、同時に明治という気骨ある時代であったことも見逃せない。これらは当時としては、どれも至極当り前のことかもしれないが、それが天性の資質を磨きあげてくれたのであろう。どんなに良き資質であっても、情緒の安定なくばその力は存分に発揮しえないからである。

とにかく激戦ともなれば、冷静沈着、機をみるに敏、そして勝機を生む果敢な行動が要求されるがこれが難しいところで、余程肝<sup>きま</sup>つ玉が座っていないとそうはいかぬものである。しかもことなき時は、温厚円満そのものだったというのだから、まことにもって理想的な軍人像だったといえる。

戦闘の後に、長い警備生活を送ったことがあるのだが、その時なども地元中国人との関係はきわめて良好であった。そして転任の時には住民が別れを惜しみ、感謝状とともに友好の詩を彫りこんだ懐中時計まで三明大尉に贈ったというのだから、在任中の言動がどのようなものであったかとおおむね察しがつく。



だが思うに、こうした日本の軍人像というものは、現在ではもうまったく語られることがない。おおかたは残忍で、悪逆無道のかぎりをつくしたというのが定説となり、次代の若者に伝えられていく。そうした日本軍への映像が、南京事件にさらに重ねられ、よりいっそう残酷な印象を植えつけているのだが、そのようなならず者の集団が、精強な軍隊でありえようはずがない。

とにかく個人であろうが、集団であろうが、善い面もあれば悪い面もある。旧軍としてそうなのだが、現在のように、こう悪い面ばかり強調していたのでは、その実相は把握できない。

## 二 鹿兒島四十五聯隊の北進

第六師団の最左翼に位置するこの聯隊は、南京城の西側、つまり揚子江と城にはさまれた六キロほどの湿地帯を北へ進んだ。したがって、城内突入の役割はまわつてこない。退路遮断しゃだん、それが役割であった。

それだけに、この竹下義晴大佐ひさの率いる鹿兒島の聯隊は、大軍とぶつかる可能性を当初から秘めていたのだが、はたせるかな随所で数倍、数十倍という大変な敵を迎え討つことになった。

### 1 揚子江を逃げる敵船

十二月十一日

前田吉彦少尉は小隊を濠クラックの土手下に止めると、炊飯すいはんを命じた。とにかく昨夜から何も食べていない。睡眠不足と疲労にくわえ、腹の中まで空っぽでは動きがとれぬ。

あたりは一面低湿地帯で、右手には遙か遠く四キロほど先に南京城の城壁が小さく見え、激しい銃砲声を響かせている。城壁をめぐる攻防がすでに始まっていたのだ。左は田圃たんぼや葦の生い繁る荒地が続いていたが、その葦の間からとどころではあるが、揚子江の濁流が垣間かいま見えていた。

この濠クラックに沿った土手道は、ほぼ南北に走っていたが、先行した第三大隊が二キロほど先の上河鎮の手前あたりで敵と遭遇そうごうしたのであろう。銃声激しく、その流れ弾が飛んでくる。あたりは一面湿地帯であるし、これでは身ひとつ隠すところとてない。

それでも兵士たちは、濠から黄色く濁った水を汲んできては、飯を炊いた。これではまた、赤飯のようになるが、それもやむをえない。とにかく何でもいいから食えればよい。炊飯の兵らをそのままにして、前田少尉は土手を上っていった。

すると、江上に黒煙をはいて溯航そこうする、おびただしい数の船が眼に入った。先ほどは、その影すらなかったのだから、ほんの少し前に下関シャカシから出てきたものであろう。双眼鏡をとりだしよく見ると、何とどの船も灰色の軍服でぎっしりと埋まっている。しかもマストの上には、英国の旗を掲げている船もあれば、米国旗を掲げている船もある。明らかに、脱出する中国軍の将兵であつた。

「おのれ、卑怯ひきょうな真似をしおつて……」

前田少尉は、齒をかみしめたがいかんともなしがたい。中立国の旗をたてに逃亡するなど、もちろん違法行為である。

したがって、たとえ英国旗であっても、こうした状況下では砲撃は許される。とは言え、ここには砲兵はいない。攻撃もならず、このままみすみす敵を逃がすのかと思うと、前田少尉の腹は煮えくり返るようであった。

その時、下駄ゾットをはいた水上機が飛んできた。それは第三艦隊の海軍機であった。そしてその船団の上空を旋回しはじめたのである。時折高射砲弾が、その近くに炸裂さくれつするが、とても当る気配はない。水上機は、船団を監視しているのか、あるいは観測をしているのか。

と見ていると、南の彼方から遠雷のような響きがあり、その船団の近くに轟然たる音とともに砲弾が炸裂した。

「惜しい、もう少した」

と前田少尉は、思わず叫んだ。この射程外であることは、野砲兵第六聯隊（熊本）の観測所でも確認され、師団司令部に報告された。

そこで、後方の蕪湖にあった野戦重砲兵十三聯隊に、翌日の江上攻撃にそなえるべし、と下令されたのであった。

## 2 野戦重砲米艦を砲撃

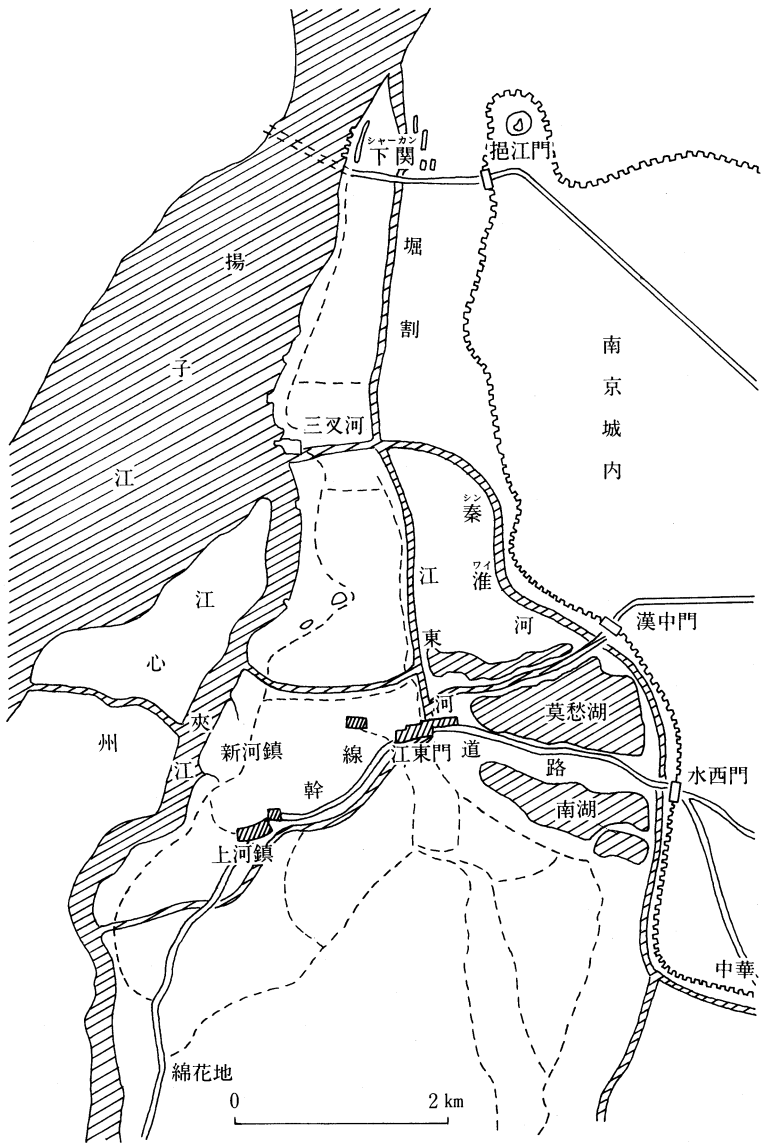
十二月十二日

この日は、城壁をめぐる攻防が最高調に達したのだが、同時に浮足だった中国軍の脱出も始まったのである。

その脱出組は、まず南京城の北下関シヤウカンの港から、ありとあらゆる船を利用し、上流の漢口をめざした。だが不幸にも、揚子江というのは、下関から大きく南へのびていたため、すでに北進していた鹿児島四十五聯隊のすぐ脇を通らねばならない。また対岸には、すでに第五師団の国崎支隊が渡河していた。

ために彼らは、その攻撃をかわそうとして、中立国である米英などの旗をたて、自らの身を守ろうとした。もちろんこれは、戦時国際法違反である。とにかくこのころの中国軍というのは、すべてが規則ルールなき戦いで、便衣兵問題もそうだが、手段を選ばぬ戦争であった。結果は、常に関係ない人々にまで災いを及ぼすことになる。

前日の野砲は射程不足であったが、この日、十二日は早朝から小倉の野戦重砲兵十三聯隊は、その十五糎榴サンチリゅうだん弾砲を、揚子江上に照準をしばらく待ちかまえていたのであった。



この野戦重砲兵聯隊は、橋本欣五郎大佐が率いていたが、同大佐は急進改革派桜会の盟主として知られた人物である。

野戦は、敵を包圍殲滅せんめつするをもつてよしとする。これが長い間世界の戰略家によつて理想とされた、野戦での勝利であつた。したがつて降伏するならともかく、逃げる敵は追撃しなければならぬ。

戦争というものは、こうしてみるとまことに非情、殺すかさもなくば殺されるか、それが戦争というものだったと改めて思い知らされる。しかしこの峻烈さは、平時においては、なかなかもつて理解しがたいところで、

「何も、逃げる敵を射たなくてもいいではないか」

と、いうことになりかねないのだが、その直前まで戦友が殺され、また自身も生死の関頭に立たされていた人間なら、必ずその敵は射つ。だがそれが一晚寝ると、あるいは幾日かたつと逃げていく敵を見ても、今度は、

「逃がしてやるか」

と、いうことにもなる。戦場での体験ある人は、ほとんどがそう言う。しかもそれは、洋の東西を問わず、また古い昔でも、共通した人間の気持であるようだ。自分の生命を危うくするものへの憎しみが、いかに激しいものであるか、それは命を有するものの強烈な本能の発露というべ

きか。

戦場の体験者は、逃げる敵を追撃するのは至極当然だと受けとめている。だがその体験のない人は、しかも平和な時代の人間は、そこまでしなくても、とその非人道性を感じたりする。

かく言う私自身も、そんな感を抱いていたのだが、戦場での話を多く聞いていくうちに、その心情がだんだんと分るようになってきた。人間の生きようとする性の激しさを感じとったのだが、追撃という戦場でのほんの一齣ひとまを理解するだけでも、かなりの時と労を要するものだ、ということを実感させられたのであった。

さらに言えることは、今日と当時とでは、戦争そのものの様相がまるで違う。大きな会戦や包圍殲滅戦せんめつせんなど遠い昔のことで、現在では局地戦が主となっている。それともう一つは、人権意識の昂揚で、戦争にもその眼が向けられているということだ。

たとえ戦場の実態を知らなくとも、あるいは平和なところに身を置きながらも、その意識で戦場を見つめている。戦争が殺しあいのあるところからすると、これは大きな矛盾だが、とにかく五十年前とは戦争の様相も、意識も、何も彼も違っているということだ。

すべてがこんな調子だから、南京戦そのものを理解するというのは、とにかく容易なことではないが、この重要な実相を抜いての虐殺論議は、的はずれで無責任な論となる。



揚子江を逃げる中国兵が、その船に中立国の旗をたててみたとして、船上にあふれんばかりに乗っている軍服姿を見れば、砲撃されるのは当然であった。橋本欣五郎大佐も、その報告を受けるや躊躇なく砲撃した。ところがその船の中に、たまたま英国の砲艦レディーバード号がいたところから問題は生じた。

英国海軍の抗議にたいし、日本軍も陳謝したのだが、艦には多数の中国兵が乗っていることからして、英国海軍もそれ以上の措置はとれなかった。やはりこれは、中立国としてはなすべきことではなかったからである。

ところが、この十二日はさらに同じような問題が生じた。今度は日本の海軍機が、南京の上流四十キロほどのところで、米国の砲艦パネー号を撃沈してしまったのである。攻撃したのは第二聯合航空隊の村田重治大尉で、戦場にいるからには当然敵艦と判断したのである。

実際その判断は正しく、そういうところにいること自体がいやがらせと見られても仕方がない。後に村田少佐は、真珠湾攻撃の時に雷撃隊長をつとめている。

米国の抗議に接した第三艦隊の長谷川中將は、ただちに救援のため砲艦保津を派遣したが、これは死傷者がでているだけに、大きな国際問題となった。

これによって日米間はただならぬ雲行きとなったが、松井大將が自ら米海軍のカーネル少將を訪ね陳謝し、また政府も広田弘毅外相をして謝罪の意を表し賠償にも応じたため、ようやく解決

したのであった。

### 3 江東門街 送信所の占領

このように、十二日は早朝から重砲が火をふくというように、南京城の攻防は最高頂に達した。第六師団でも熊本、大分、都城の三聯隊は、いよいよ城壁へと挑んでいったのだが、鹿児島隊は城の西側にある湿地帯を北進する。

前田少尉の小隊は、田圃たんぼの畦道あぜみちをぬけ、東へ東へと廻っていった。江東地区への進出を命ぜられた、第二大隊の先陣をうけたまわったのである。左手の上河鎮では、相変わらず激しい戦闘が続いている。また右手の南京城一帯においても銃砲声いり乱れ、流れ弾もどこから飛んでくるのか分らぬ始末で、剣呑けんおんなこと夥おびただしい。

畦道はやっと一人が歩ける程度しかなく、ちよつと重心を失えば、たちまち深田にはまりこんで足も抜けない。とても大隊が、進撃できるようなところではなかった。大小の濠ウレリフを幾つも越えたところで、小隊の先頭が手をあげ止まれる合図をする。一瞬、全隊員に緊張感がみなぎる。

前方に二、三の敵兵が見えるが、このほかどれだけの敵がいるのか、はつきりとは分らない。試しに射つてみると、たちまち激しい反撃を喰くった。軽機、重機の銃座が幾つもあるようだ。

泥んこになりながら、畦道などをはうようにして進むが、時折猛射を受け、顔もあげられない。それでもやつとのこと、田圃の中の一軒家にたどり着く。物陰から擲弾筒てきだんとうで応戦するが、これもそうこうしているうちに、右手南京城のほうからすさまじい砲弾の炸烈音さくれつが響いてきた。城壁の南西の角あたりに、野戦重砲の十五糎榴弾サンチリゅうだんが打ちこまれていたのである。重砲の威力は、さすがに凄まじく一時いっときすると、そこには大きな突撃路が開かれていた。

都城二十三聯隊は、そこから城内へと突入したが周囲の銃座から猛反撃を食い立ち往生する。だがそれでも、何とかそれを撃破しながら城壁上にたどり着いた。

それは、十二日の四時過ぎであった。

その四時ころになって、やつと中隊長以下本隊が前田少尉のところを追いついた。途中やはり上河鎮方向から、相当敵の猛射にあつたらしい。

「中隊は、夜になったら突撃する。速射砲を射ちまくろう」

と、中隊長の日高精藏大尉は言う。所定の時間になると、速射砲が猛然と射ちだした。機関銃中隊の重機二挺ちようも、射ち始める。突入間近と、全神経を前方に集中する。我がほうの射撃がやみ、一瞬奇妙な静寂が訪れた。どうやら敵は、突入を察し逃げてしまったようであった。

だが一方、揚子江にもっとも近い上河鎮では、第三大隊の田中軍吉大尉が、激しい攻防をくり

かえしていた。田中大尉は、やむなく他中隊の応援を求め、この後やっと上河鎮を占領することになる。

暗闇の中で、次に下された小隊への命令は、

「江東門の無電台を占拠せよ」

というものであった。無電台というのは、南京放送局の電波送信所のこと、中国式には南京中央廣播電台が正式名であった。また江東門というのは部落名で、南京城にある門ではない。旧南京城の門ではあるが、今の南京城は、そこからさらに二キロほどいったところで、そこに水西門がある。前田少尉は、

「互いに離れぬよう注意しろ」

と指示し、時折懐中電灯で周囲を探りながら、江東門へと進んだ。昼間、大きな鉄塔がすぐ近くに見えていたのだが、暗夜の道行きは、ほんの一キロほどでも、長く長く感じる。だが、上河鎮に通ずる道であるだけに、広い道であった。

都城の二十三聯隊が、南京城に突入したとすれば、他の地区でも突入したに違いない。それにしては、不気味なほどの静かであった。あれほど激しかった銃砲声が、どこからも聞こえてこないのである。

「いったい、どうなっているのか？」

といぶかりながらも、前田少尉は用心深くゆつくりと進んだ。路上には倒れた電柱やら、垂れ下がった電線がいたるところに散在していたが、道路は石畳が敷かれ、いかにも都会風の綺麗な道であった。その蜘蛛の巣のような中を、着剣した銃を持し五十名の兵士らは進んでいく。

しばらく行くと、右手が塀になってきた。そして大きな門があつたので、照らしてみると、

「中央工兵学校」

という、大きな看板がかかっていた。中には兵舎らしい建物が幾つかあるようだが、もちろん人の気配はまったくない。前田少尉はそこへ入ってみた。

「隣が無電台のようです」

と、脇の下士官が言った。そこは古い木の塀で仕切られていたが、それを足で蹴とばすとわけもなく壊れた。暗くてよくは分らないが、広く整然とした構内との印象を受けた。建物内部を探らせたが、ここにも人の気配はまったくない。

前田少尉は、師団から「無電台にかかげよ」と命ぜられた大日章旗を、高い電柱の上に立てさせた。今は暗くて見えないが、やがて夜が明ければ、後方の司令部からでも望めるに違いない。

しばらくすると、日高大尉の率いる中隊の本隊が到着し、送信所につづく江東門街へ入っていた。だがそこもまったく人影はなく、不気味なほど静まりかえっていた。中隊は空き家になっ

た民家を借用し、宿営に入った。

この小さな街は、城外の湿地帯の中にあるにしては、意外なほど整えられた街であった。家々も石畳が綺麗に敷き詰められていた。そんな街で、中隊はゆっくりと休息できたのは幸いであった。

そして前田小隊のほうも、警戒の兵を残し休息にはいったのだが、前田少尉もコンクリートの床に火を燃やし暖をとったが、そのうち眠くなってごろりと横になった。本当は腹がへっていたのだが、食うものは何もない。だから、寝てしまうほかなかったからである。

#### 4 十三日 城西での各戦闘

十二月十三日の夜が明けると、あたり一面霜で真っ白であった。前田少尉は、軍刀を片手に外へ出た。高い電柱の先端には、昨夜かかげた師団からの大日章旗が、風にはためいていた。今日は、この電波送信所を確保しているのが、前田小隊に与えられた任務だったのである。

だがあたりは、早朝から激しい銃声がこだましている。チェコ機銃の乱射にたいし、我がほうも重機の連続点射、そして時には薙ぎ射ちと、かなりの激戦のようだ。西からも東からも、銃砲声が響いてくるのだが、東からのは、自分らの中隊が戦っているものとばかり前田少尉は思っ

いた。

しかし中隊は、この時すでに北へ向かっており、この戦闘は、その後続いた第三大隊の交戦だったのである。

そんな激しい銃声の中にあつて、電波送信所の裏庭では、一人の兵が外套がひとうにくるまって、何事もなにかのように、たくさんの飯盒はんごうを棒につるし、無心に飯をたいていた。これも一つの、戦場風景であつた。

前夜は、不気味なほどあたりは静まりかえつていた。だから前田少尉もまた兵士らも、ぐっすりと眠ることができた。だが静かではあつたが、前夜、南京城内はほぼ制圧されていたのであつた。

しかし、城内での投降はほとんどない。それでは四万もの城兵はいつどこへいつてしまつたのか。それは、一部は城内の難民区へ逃げこんだが、おおかたは城を抜け暗夜にまぎれ北シヤの下関カシへ、あるいは城西の湿地帯へと逃れていた。守将唐生智もその一人だったが、誰もが彼のように船に乗つて逃走できるとはかぎらない。

それでもかなりの城兵が、闇の中を船や筏いかだを使って対岸に逃げおおせたことは確かであつた。だがまだそれでも万を越す城兵が、暗い湿地帯の中で脱出の機を狙つていたのである。

しかしすでに、堅固な砦とりでであつた上河鎮は陥ち、電波送信所のある江東地区も占領されている。

残るは、わずかに湿地帯の北半分しかなかった。その中に袋の鼠となった彼らには、もはや投降  
いがい道はなかつたのだが、それでも彼らは強行突破を試みた。

そこに、悲惨な戦闘を生ずる源があつた。

そして夜明けとともに、脱出できるか否か、彼らの命運を賭けた最後の戦いが始まつたのであ  
る。それは、日本側にとつても南京攻略戦最後の戦いであつた。

この日、落城の翌朝である十三日の未明、戦闘は湿地帯のあちこちでほぼ同時に始まつた。こ  
こでは湿地帯のほぼ中央にいた前田小隊の追撃戦から追つてみよう。

### その一 筏いかだとの小戦闘

宮内軍曹の指揮する一隊は、江東河の土手上に軽機をすえ射ちまくつた。彼らは大きな筏を組  
み、大きいのは百人くらいの兵が乗り、応射しながら揚子江へ抜けようというのである。

川幅は広く、それに流れもかなり速い。だが筏には、何しろぎつしりと乗っているのだから、  
迎え討つ宮内軍曹らにとつては、むしろ組みしやすい敵であつた。彼らは薙なぎ倒され、川の中に  
転落する者が続出した。

次々とする大小の筏からは、どれもが相当数が川に落ちこんでいったが、そのうちさすがにこ  
れでは不利とみて、彼らは一部が岸にさがり反撃してきた。ちょうどそのころ、宮内軍曹らの隊



も銃弾をほとんど射ちつくし、やむなく負傷者をいたわりながら、送信所へと戻ったのであった。しかし川面には、累々たる屍体が浮き、下流の揚子江へと流れていった。

その数、およそ四、五十か。

## その二 新河鎮で大軍と遭遇

前日の十二日は、田中軍吉大尉の中隊が、二人も小隊長を失うという激戦のすえやつと占領した上河鎮であったが、その上河鎮を、十三日の未明というよりまだ深夜のうちに出発した中隊があった。

それは、おなじ第三大隊の大菌中隊であった。夾江にそった土手道を北の下関をめざし進んだのだが、夜道でしかも霧に包まれているとあつては難渋も当然であった。

まもなく新河鎮かと思われるころ、小さな部落があつた。ここも、人の気配はまったくない。大菌大尉は、状況からして夜明けを待つて進撃したほうが良策、と考え大休止とした。兵たちは寒さにふるえながらも、無人の民家にもぐりこんだり、あるいは土手下で丸くなって一時の眠りをとつたのである。

夜が白々と明けはじめたが、あたりは霧に包まれ視界はひらけない。すでに中隊の将兵は、凍りついた残り飯で腹ごしらえをし、出発の準備を整えていた。尖兵をうけたまわつた赤星小隊も、

小行李から小銃弾を補給した。各自百六十発であった。小隊長赤星少尉は、

「道の上に集合」

と言ひ、自らも土手を登っていった。霧のため見とおしがきかないので、隊員の把握は念入りにせねばならない。土手をあがりきると、すでに人の気配がする。どの分隊かと思ひ、少尉が寄つていくと、思はずどきつとして立ち止まった。

何と、敵の將校ではないか。しかもその背後には着剣した兵の姿もあつた。相手も氣付いて立ち止まる。互いに睨みあふこと数秒、ともに身動きもならない。だが敵の將校が、ちよつと右手を動かしたその瞬間、赤星少尉は横つ飛びに飛びすざると、

「敵襲、敵襲！」

と、叫んだ。赤星小隊は、いきなり混戦乱戦の渦に巻きこまれていった。敵は土手道を南下してきたのだ。素早く土手道にすえられた六丁の軽機が、いつせいに火をふく。三丁の擲弾筒も、これに続いた。だが敵も、激しく反撃してくる。

軽機は先頭の敵を薙ぎ倒していくが、それは九牛の一毛で、後から後からと湧くがごとく敵兵は押し寄せてくる。しかも彼らは腰だめに射ちながら進んでくるのだ。倒しても倒しても、それを踏み越えまるで軽機の弾にあたるためであるかのように進んでくる。まさに怒濤のごとく押し寄せるのであつた。

その間を、互いの手榴弾が交叉する。敵の少し後方でそれが爆発するかと思えば、味方の中でも敵の手榴弾が轟然と音をたてる。なかには落ちてきた手榴弾を擲んで、敵に投げかえす兵もいる。中国軍のそれは長い柄がついているが、それが回転しながら敵のほうへ飛んでいく。彼らはあわてて投げるため、爆発までの余裕がありすぎるのだ。だがそれを投げかえすには、大変な勇氣がいる。擲んだ瞬間に爆発するかもしれないからだ。

土手をおり、田圃の乾いたところに、彼らが迫撃砲を運んでいく。これを射たれては、被害が大きい。集中射撃で、これを制圧する。

高橋義彦中尉の山砲小隊が、山砲を土手道に引つ張りあげる。一人二人と傷つき砲から手を離すと、すぐかわりが飛びつく。だがすでに、土手下では突入してきた敵との白兵戦が始まっている。銃剣で突く、銃を逆に持ち台尻で殴り倒す。まさに阿鼻叫喚あびきょうかん、地獄のような修羅場しゅらばの出現であった。

「弾がない」

これも、悲痛な叫びであった。

「ここにあるぞ」

倒れた敵の弾帯を奪い、その戦友に放り投げる。中国軍は、日本の三八式歩兵銃をかなり多用していたのである。それが、各所において彼らにとつては仇あだとなった。

土手道に引きあげられた山砲は、すかさず装填そうてんされる。この乱戦混戦の中で、あたかも練習のそれであるかのように、手ぎわよくそして敏速に砲兵は行動する。だがこの時、山砲弾の手持ちはわずか十八発であった。その貴重な弾丸を、零距离射撃で敵の中に叩きこんでいく。

機銃の銃身も、まっ赤に焼けついてしまう。すると脇のたまり水を汲みあげては、銃身にぶっかける。また、飛びつくようにして射ち続けた。それでも彼らは、無限に湧きでる泉のごとくやってくる。

### 「中隊長戦死」

その悲痛な叫びも、射撃音と炸裂さくれつする手榴弾にかき消され、かえりみる暇いとまとてない。赤星小隊長が指揮を継承するが、もはや指揮も何もあつたものではない。時折、彼らの後方からチャルメラのようなかん高い喇叭ラッパが鳴り響く。突撃喇叭なのか。十倍、二十倍もの敵との闘いは、果てしなく続くかにみえた。

それもそのはずで、彼らは前進するほかなかつたのである。後退すれば、そこには腕章を巻き大きなモーゼル拳銃を構えた異様な兵士がいて、前の兵士が逡巡しゆんじゆんしたり、退ひこうとすると、その兵らを射殺していたからである。

これが中国軍の、悪名たかき督戦隊とくせんたいだったのである。腕には督戦という大きな腕章がついていた。兵士らは、いずれにしても死以外にはなかつたのである。これも、どの国の軍隊にも見られ

ぬ、まことに異常な行為であった。

高橋義彦氏 独立山砲第二聯隊小隊長

初めに突撃してきたのは軍官学校生徒で、これは勇敢だった。しかし次第に弱兵となったが、督戦隊に押し込まれてきた。その督戦に射たれた兵は、三百はくだらないだろう。ひどいことをするもんだと、たまげましたよ。

山砲は零射撃の連続で、時には砲腔ほうこうの中を敵弾が通ってくる。それにやられ、こめる砲弾が血まみれになったが、その血弾をこめては射撃した。周囲の湿地は敵味方の屍体で埋まり、枕木を敷きつめたようになった。その上をさらに、はいずり廻つての乱闘となった。

(『敵本戦史』)

この新河鎮での遭遇戦では、敵の遺棄屍体およそ二千三百、その中には将官、佐官級の参謀も含まれていた。おそらく、守城軍最後の組織的脱出行だったであろう。しかしそれにしても、夾江きやうかうや、それに続く湿地帯を埋めつくした二千三百もの遺棄屍体は、いかに激しい戦いであったかを示して余りあるものであった。

だが一方において、中隊の損害も大で、大藪庄藏大尉以下、戦死傷五十二名。中隊兵力は百六

十名であるから、その三分の一を失ったのである。とはいえ、一万五千という大軍を一ヶ中隊が迎え討ったのである。何と百倍近い大軍を相手にして、これを撃破しえたのは、むしろ奇跡としかいえない。

浜崎富藏氏 第一小隊第一分隊長

午前十時頃、援軍が駆けつけた時は既に敵を撃退した後であった。中隊長は抜刀のまま堤防上を右へ左へと駆けながら、

「中隊の墓場はここぞ！ 一步もひくな」

と、眼も血走り、声もからして督戦したと、最後まで中隊長の近くにいた戦友が語ってくれた。

押し寄せた敵は幾千の屍体を遺棄して、あるいは河中に飛び込み、または筏から舟から敗走し、かろうじて我らの左側を河畔伝いに脱出した敵も、後方にいた師団騎兵聯隊によつて全滅されたという。

まさに形容しがたい激戦であつたが、それというのも、土手道は左が揚子江岸、右が湿地帯と、ともに足を踏み入れることのできない地域であつたということが、この奇跡を生む一因となつ

たことは確かである。

もし左右に展開されたら、衆寡敵せず、たちまち中隊は全滅の憂<sup>う</sup>き目を見たに違いない。それと、山砲の小隊がついていたことも幸いであった。この零距离射撃は効果抜群で、敵の隊列に恐怖と大混乱を起こさせた。だがいづれにしても、両軍にとって悲惨きわまりなき戦闘であったことは確かである。

この時の遺棄屍、夾江とその付近で二千三百七十七、そして揚子江岸で一千、合計三千三百七十七であった。その数が正確なのは、次のような理由からであった。

宮園盛二氏 第一小隊第二分隊長

師団司令部より、

「上河鎮付近戦闘における敵の遺棄屍体数は、過小報告せられているようだから、至急調査報告せよ」（十五日師団長戦場視察所見）

とのことでした。よって中隊命令により第一小隊は、浜田友太郎准尉指揮の下現場に急行、屍体数確認の調査を実施した。結果、二、三七七名を確認し師団司令部に再度報告された。

### その三 綿花地での騎兵隊の戦闘

新河鎮で血みどろの激戦が続いている時、そのちょうど同じころ、六キロほど南の綿花地でもこれまた騎兵隊が南下する六千の敵と遭遇、激戦を交えていた。

それは、四十五聯隊ではなく、猪木近太中佐の率いる騎兵第二聯隊であったが、敵は一本道を長い縦隊を作つて、脱出する途中であつたことなど、新河鎮とまったく同じであつた。

ただここでは、聯隊の主力が正面にあり、軽機、重機で敵の先頭をつぶしていくなど、兵力に余裕があつた。とはいえ、我に倍する敵であつたが、このころはすでに数倍の敵と戦うのはごく当り前のこととなつていた。

そして、乗馬の一個小隊が後方に廻つて退路を遮断するなど、騎兵としての特性を充分に發揮した戦闘であつた。やがて敵は総崩れとなり、西の揚子江方面へ壊走していった。

この時の遺棄屍体は、ほぼ三百であつた。

#### その四 監獄前での遭遇戦

前田少尉の確保している電波送信所の少し東寄りのところに、中央陸軍監獄所があつた。もちろんこども、人っ子一人いない無人の一劃であつた。

第三大隊主力は、先行した第二大隊の後に続き、この未明江東門部落から、さらに北の下関<sup>シャーク</sup>へと向かつていた。ところが、この監獄付近に、突如として敵が出現した。



ただちに応戦はしたものの、隊列は長くのびきっていた。その横を不意に衝かれたのだから、当初の苦戦は避けられなかった。しかも彼らは、揚子江へ逃げのびるための、必死の脱出行である。

幸いにも重機、軽機がその近くにあり、第九中隊長の前川参次郎大尉は、ただちにこれを指揮して応戦した。しかし、不意の遭遇戦であったため、主役は手榴弾の投げあいとなり、さらには互いに肉迫する白兵戦となった。

そして戦闘が終わった時には、濠の中も、また石畳の路上も敵の遺棄屍でいっぱいであった。だが被害も大で、前川中隊長重傷、小隊長岩間少尉戦死、その他多数の戦死傷者をだした。

そして、敵の遺棄屍体はほぼ百であった。

### その五 三叉河の戦い

江東門街で、激しい戦いが交されている頃、成友少佐のひきいる第二大隊は、最終目標である下関へと向かっていた。途中、少数の敵と遭遇しながらもこれを撃破しつつ進んだ。

九時を過ぎると、朝靄もすっかりと晴れわたり、行く手に三叉河の街が遠望できるようになった。その時、濠の対岸から不意に猛射を受けた。

敵は三叉河の部落で頑強に抵抗する。とくに江岸に近い三階建工場に立てこもる敵がもつとも手強い。窓という窓を銃眼にして撃ちまくるので始末におえない。

ちようどおりよく駆けつけてきた機関銃中隊と、大隊砲小隊、それに配属された速射砲小隊によって、一斉に援護射撃をさせる。そして火を放つたので、さすがの頑敵も潰走した。しかしその大部分は、我がほうの銃弾に倒れた。

早速部落を占領したが、今度はまた濠の向こうから猛射を受けた。迫撃砲弾も飛んでくる。互いに二十メートルの至近距離で射ちあったが、こんなことは初めてだった。硝煙はたちこめ、銃砲声は、耳をつんざいた。

だが結局は、敵は数百の屍体を遺棄して下関方面に退散した。(『成友回想記』)

激戦とはいえ、濠の内外を埋めた数百の屍体は、まことに惨たるものがある。この時の戦死者は、中国側発表では五百となっている。ほぼ妥当な数字だといえる。日はすでに落ち、第二大隊は三叉河の部落に宿営した。

十二月十四日

夜が明けると、またも濃い霧に包まれ何も見えない。しかも、不気味なほど静かで、銃声はただ一発下関のほうから聞こえてきただけである。

「本当に、戦争は終わったのだろうか？」

前田少尉は霧の晴れるのを待つて、屋上へあがってみた。そこには送信所そなえつけの、ドイツのツァイス社製の望遠鏡がおかれていたからで、まず下関ジャークンのほうからのぞいてみた。

中隊の姿は見られなかったが、下関の街なみの先に揚子江が顔をだしていた。なおも廻していくと、何と軍艦旗をひるがえした艦が、いくつも碇泊ていぱくしている。第三艦隊の十一戦隊、砲艦保津、勢多以下が、勢ぞろいしているのであった。

「ああ、南京は陥落したのだ」

と、前田少尉は感じた。しかし、まだ夢のような気がせぬでもない。

その前田少尉の案じていた中隊は、他の中隊とともに下関ジャークンへ向かっていた。途中、部落の中に中国兵がかくれていることは分っていた。しかし星条旗を家の前に立てているので、知らぬ顔をして通りすぎる。外国権益の尊重は、厳しく通達されているからである。

これが第二大隊の主力だったが、前のほうには大隊長の成友藤夫少佐も馬に乗って進んでいた。しかし、敵との遭遇はまったくない。

ところが、である。いよいよ最北の揚子江岸までくると、その広い河川敷には、あふれんばか

りの中国兵が、ただもう、それこそ途方にくれたように、ほんやりと立ちつくしていた。彼らに戦意がないのは、一見してそれと分った。

第六中隊の山本隼人大尉が近づき、通訳に、

「武器を捨てろ」

と、言わせると、彼らは素直にそれにしたがいがい、たちまち幾つもの小銃や軽機の山ができた。そこへ馬に乗った成友少佐が、その中へ入っていったのだが、彼らは何を思ったか、いつせいに拍手でこれを迎えたのである。

少佐の顔は髭ひげがすつかりのび、まるで鐘馗しよまさまのようであっただけに、彼らにはよほど偉い人と映ったのかもしれない。もつとも、髭ひげののび放題は少佐だけではなく、中隊長の山本大尉もまたさらにひどく、およそ耳から口のほうまでまるで垂れ下がるようであった。それに兵たちも皆そうで、むしろ中国兵のほうが、こざっぱりした表情であった。

しかし、まるで自軍の将を迎えるようなこの拍手には、むしろ日本の将兵のほうあうけが、呆氣あうけにとられた感じであった。成友少佐は、山本大尉らとはかつて、この大量の捕虜を釈放することにした。大隊には、彼らを捕虜として扱う余力などない。また、釈放しても危険はない、と判断したのであった。

この時の捕虜の数は、少佐たちの見たところほぼ五千というものであった。その他砲三十門、

自動車十数輛、軍馬十数頭、また小銃機関銃は多数となつてゐる。

山本大尉は、馬の上から彼らに大声で伝えた。これを脇の通訳が、一言一言これも大きな声で伝える。

「君らは、よく戦つた。しかし、もう戦いは終つたんじゃ。これからは仲良くせにやいかん。

蒋介石總統は膺懲せにやならんが、君たち將兵には怨念はない。よろしく武器を捨て、銃をとり新中国建設のために働いてくれ給え。これから懐しい肉親や、郷里の人たちが待つ故郷に帰り平和をとりもどしてくれるように。では、さらばじゃ」

髭面の山本大尉が、こう大演説をぶつと、彼らの中から再び大きな拍手が湧いた。そしてそれが一時して静まると、彼らの中の一人が、

「帰るには揚子江を渡らなければならぬが、その船がないんだ」

と、大声で言つた。通訳からその意を伝え聞いた大尉は、うんと唸つて首をひねつてしまつた。いかにも困つたような大尉の仕草を見て、彼らの中からどつと笑い声がわいた。とにかく彼らも、戦いの終つたことを実感しえたし、また安全が確保されたことの喜びがその表情にあふれていた。この直後に、下関に進出してきたのが、京都の十六師団であつた。それは佐々木少将のひきいる旅団の一部であつたが、この五千もの捕虜を見て、成友少佐たちとの間に、まずでたのが、

「この捕虜を、どうするんです？」

という、話であった。捕虜の数が多いのには驚いたのであろう。その時山本大尉は、

「後は、おぬしらに頼むか」

と、冗談めかして言ったのだが、もちろんそんな気は毛頭ない。だがそんな冗談でも、人伝ひとつたに伝わっていくと、十六師団がその捕虜を引きついで、というような話にまでなっていくのだから、妙なものである。

彼らは付近の材木などを集めてくると、筏いかだを組みにかかった。対岸の江興州まで渡れば、当面何とかなるからである。また渡河をあきらめた者たちは、各々およそ五十人ほどの集団をつくり、白旗を先頭にたて、南のほうへ発つていった。

しかし後に分つたことは、その中には再び捕えられたり、攻撃を受けた者もあった。戦いが終つたとはいえ混戦乱戦の直後とあれば、こうしたことも起こりうることであった。

なお、この下関ジャウカンでの五千人という大量な捕虜釈放の場面は、いかにも人道的であり、むしろ小説的な要素さえ感じさせるのだが、記述に創作は入っていない。

ずっと後に、この釈放捕虜の一人であった劉四海二等兵が、この時の状況を語っているのだが、細部にいたるまで一致するのが何よりの証拠となる。

しかしながらその陰には、昨日まで激しい戦いをくり展げ、隊長を失った兵も多い。また親しい戦友を殺された者もたくさんいる。彼らは、ぶち殺してもあき足らぬ思いを、眼前の捕虜たち

に抱いていたであろうことは容易に察しがつく。そのこみあげてくる憎しみの情をぐっと押し殺し、三々五々散つていく捕虜たちを眺めていたのである。

## 5 将なき兵の悲哀

こうして、鹿兒島四十五聯隊の戦いは終わった。そして南京攻略戦も終了したのだが、この城西地域の湿地帯に残されたのは、累々たる戦死体であった。だがこの地域での戦闘は、我がほうの損害も大であったが、彼らにとつてもまことに不本意な戦いであつたに違いない。ただ徒らに屍しかばねを築くだけの戦闘で終わった。

なぜこのような不本意な結果を招いたのか、その責はかかつて、守将唐生智將軍にあつたと言つていい。

まず第一に、日本軍が城壁を破つて城内に突入した時点で、彼は降伏すべきであつた。もはや大勢はいかんともしがたいし、また敵に出血を強いるという目的も、こうなつては達成しがたい。これは、誰の眼にも明らかであつた。つまり南京衛戍軍えいじゆの役割は、完全に終つていたのである。だが彼は、降伏しなかつた。

それなら撤収作戦ということになるが、そのためには城西地区を守備していた五十一師、五十

八師の合計四千の兵力だけでよいのか。十二日夜には、すでに城西の南半分には日本軍が進出しているのである。残された北半分と下関シヤカンを確保するためには、当然増援が必要だったはずである。だが、それらの措置はいつさいとられていない。

撤収作戦は、もつとも困難な作戦であることくらいは、守将唐生智とて軍人である以上当然知っていたはずである。にもかかわらず、何らの措置もこうぜず、夜七時、

「各部隊とも、適宜城てきぎを脱出せよ。その退却集合地点は左の如し」

と、その目標地点を各部隊ごとに示し、自らは第二軍団の幹部らとともに、下関から対岸の浦口へ渡ってしまったのである。ただ、八十三軍だけは翌朝まで戦鬪を継続し、その脱出作戦を助けよ、という。

しかし、適宜脱出といったところで、とてもそれができるような状況ではない。結局は東の湯水鎮方向へ逃れた部隊も、また城西を通つて南へ、あるいは江上へと逃れた部隊も、ともに壊滅的打撃を受け、いづこも死屍累々ししるいゐるたる惨状を出現したのであった。

しかも督戦隊なるものまでついて、兵を銃火のもとに追いやり、降伏する機会さえ与えないという、実に酷な脱出作戦であった。いやこうなると、もはや作戦とはいいがたい。置き去りにされた大軍の壊走としかいようがない。つまり彼らは、司令官に見捨てられた犠牲者だったのである。こうした司令官を持った彼らこそ、不幸なことであった。



最後に、この城西地域での戦死体を記しておこう。これが後に、虐殺を主張する根拠となるからである。

上河鎮	一〇〇	田中中隊が対戦
送信所付近	五〇	前田小隊が対戦
新河鎮	二、三七七	大藪中隊が対戦
新河鎮揚子江岸	一、〇〇〇	大藪中隊が対戦
江東門監獄付近	一〇〇	近藤中隊が対戦
綿花地	三〇〇	騎兵聯隊が対戦
その他の小戦闘	三〇〇	
計四、	二二七	

### 三 そして終戦

この後、第六師団は徐州作戦、漢口作戦と転戦するが、やがて大東亜戦争が始まり戦局の焦点は南へと移っていく。そして第六師団も上海に集結し、甲装備各聯隊五千人という陣容で南方へ向かう。そして最後はブーゲンビル島で、終戦を迎えたのであった。

一方、南京攻略戦当時の師団長であった谷寿夫中将は、五十九軍司令官として広島で終戦となり、残務整理の後故郷に帰ったが、それもしばし、戦争犯罪人に指名され南京へと送られたのである。

この時すでに、南京攻略戦から九年の歳月が流れ去っていたのだが、国民党政府は当時の日本の残虐行為をあげくためとし、南京市民にその被害の申し出と告発者をつのっていた。ところが、告発者はいっこうに現われない。あせった政府は、係官をわざわざ市中に派遣して、その告発者を捜さねばならなかった。

それは、近く開かれる東京裁判にもこれら告発状を出さねばならないし、また何よりも谷寿夫

氏らをいちはやく裁き、戦勝国としての武威を民衆に示さねばならなかったからである。

というのも、中国は戦勝国になったとはいえ、それは連合国の一員であったその結果として得られたもので、自らの軍で日本軍に打ち勝ったということは一度たりともなかったからである。

中国の民衆もそれをよく知っていた。したがっていかに武装解除をし、日本側の武器を入手しても、それだけでは戦勝国の実感を味わいえなかつたとしても無理はない。

さらにはこの時、すでに毛沢東の共産軍と、各地で激しい内戦が始まっていたこともあった。国民党政府としては、ここで民心を掌握するためにも、自らの武威を民衆に示す必要に迫られていた。

そこで、日本の精鋭師団の長を、民衆の前に引きずりだせれば、これほど効果的なことはない。こうした背景をもとに、日寇告発状は作られていったのだが、これは南京のみならず、中国各地で同様な戦犯追及が行なわれ、北京、上海、蘇州、広州など広範囲に及んでいたのである。

それでは、第六師団への告発状はいかなるものであったか。その要点は、

「南京市内外において、第六師団は婦女子を多く含む一般市民ならびに軍人二十三万人を虐殺した」

と、いうものであった。そしてさらに、中島中将の十六師団が十四万人、その他の部隊で六万人、合わせて四十三万人を虐殺したというのである。もともとこの数字は、その後大きくなった

り小さくなったりと、いつこうに定まることがない。時と場所によって、その主張がさまざまなのである。

だが、戦闘経過を見ても分るとおり、第六師団の将兵はどの聯隊もそうだが、民間人の姿などほとんど見てはいないのである。

前田吉彦少尉は、江東門近くの農家で小柄な老婆が一人、奥にいたのを見ている。市民の姿を見たのはこれくらいだったと言うが、おそらく動けないので、家人が置き去りにしたのかもしれない。

それどころか、雨花台付近でも、村落はいずれも焼き払われていて、家さえ残っていない。それが彼らのいう清野作戦で、日本軍に利用されぬための処置であるが、それは他の地域でも徹底していた。ただ城西地域だけは、その暇もなかったのか、家屋がそのまま残っていたのだが、もちろん住民などは一人たりともいない。どこの部落も、まったくの蛻もみけのからであつた。

それはそうであろう、砲声轟くその中で、のんびり畑を耕している人間もいないだろうし、特に中国人の場合は、相次ぐ内戦で戦火にはなれている。危険が迫るとみれば、その逃げ足は見事なほど早い。必要な物を持って、さつと逃げてしまう。

これらはむしろ中国側のほうが、とくと承知のはずで、一般民衆の虐殺など五十、百という数もありえないことは、中国政府とて心得ているはずだ。とにかく、いもせぬ人間を殺せる道理も

ないのだから。

さらに告発状の細部を見ると、新河鎮での虐殺二、八七三人、漢中門で二千余名などとなっているが、新河鎮は大蘭中隊があのおすさまじい激戦をくりかえしたところで、二千三百もの遺棄屍体を残していった戦場跡である。これを少し増やして虐殺としたのか、とにかく何でも思いつくままに虐殺に結びつけようということなのであろう。

戦死と虐殺の区別ができないということもありえないが、これなどはまだ根拠らしいものがあるからいいほうで、二十三万人虐殺となると、いったいどこにそんな多くの人間がいたのか、ということになる。

とにかく、告発のどれをとってみても、まことに無理な主張としかいいようがないのだが、それだけにまともな反論すらできない。これはただ第六師団の場合のみならず、南京事件なるもの全体にいえることなのだが、それでも、南京の軍事法廷は、谷寿夫氏に死刑をいい渡した。

そして、民衆の群がる市中を引き廻した末、あの激戦の地、雨花台へと連れていき、これまた大群衆の見守る中で処刑していったのである。

しかも遺体はそのまま放置され、民衆はその所持品を奪っていった。まさにこれは、報復への儀式そのものとなったのである。

#### 四 万人坑と死体橋

そして、それからさらに二十有余年の歳月が流れ去り、日本と中国との間には友好平和条約が結ばれ、国交も再開された。互いに往き来もできるようになったのである。

こうした時の流れは、当然ながら戦争の記憶も遠いものとなるはずであった。ところが、この頃から、一部の新聞や雑誌が何を思ったか、突如として南京事件なるものの大報道を始めたのである。

テレビも、これに追従した。もともとテレビの場合は内容を深く伝えるというより、そうした大量の虐殺があつた、とごく短く触れる程度のもが多いが、これは視聴者の数が多いだけに、新聞よりさらに効果的である。そしてついには教科書までがこれに右へならえをしていく。

さらに、これらマスコミの動きにもっとも敏感に反応したのは、実は中国政府だったのである。日本の新聞に載れば、それはそのまま事実として中国全土に伝えられていく。中国政府としては、これは願つてもないよい機会であつたに違いない。今日中国で主張されている南京事件のうち多

くは、日本のマスコミによつて語られたもので、むしろ主役が日本のマスコミに移つてしまつたかの観があるのだ。

そしてその流れに乗り、ついには江東門街の一劃に虐殺記念館なるものまで建設されるようになった。第六師団にとっては忘れえぬ、あの江東門街とその一帯なのだが、そこが大虐殺の現場だということ、江東門街に建てられたのである。中国名で、大屠殺記念館とある。

広大な敷地とその建物の中には、さまざま展示品があり、虐殺があつたとの主張がなされてゐるのだが、それではどんな内容のものか、まず第六師団に関するところからみてみよう。

まず、この江東門街から人骨が発掘されたということから、ここが虐殺の現場であり、その人骨が虐殺の証だといふのである。いとも簡単にして明瞭な主張だが、ここは戦場跡だということを見無視してしまうのだろうか。

江東門街も、またすぐ近くの夾江も、そして水西門でも、あれだけの戦闘があり、それぞれ多くの遺棄屍を出したところである。当然それらはその周辺に埋葬されたであろうから、掘つてみればあちこちから人骨が出てきたとしても、少しも不思議はない。

にもかかわらず、何故それが婦女子を含む一般市民や、軍人の虐殺となるのか。

どうも論理があまりにも飛躍していて、これではむしろ反論すべき糸口さえ見出せない。そし

て江東門街での虐殺は、千八百五十というが、十数体の発掘をもって、これまた何故それが千八百という数になってしまふのか。いずれにしても、どうも話が強引すぎてまっとうな論議にはなりそうもない。

「いや、ちゃんと証人がいるのだ」

と言う。その主張は南京市発行の『証言南京大虐殺』という出版物に載っているいわば公的な主張なのだが、それでは、その中の朱友才なる人の証言をみてみよう。

「十六日の午後、中島部隊は監獄に監禁されていた方にのぼる俘虜ふりよを江東門に追いたててそこに集めた。その半数は一般市民であった。人の群れが道を埋めつくし、江東河のほとりまでのび、三、四百メートルもの長さになった」

と言うのだが、今度は日本側の話を聞いてみよう。なお中島部隊というのは、中島今朝吾中将の十六師団のことを言っているのであろう。

鵜飼敏定氏 第六師団通信小隊長

一、他の師団が警備地域に入ってそのようなことをしたら、それこそ大問題になる。城西地域には、第六師団以外の将兵はまったく入っていない。

二、中央陸軍監獄所の収容能力は三百程度で、万もの人間が入れるわけがない。第一、監獄



には十四日の夜から十一中隊が宿営しているから、捕虜など收容できない。

三、あの道を埋めつくすようにつめて歩かせても、一万人としたらゆうにその長さは三キロ以上にもなる。

十一中隊とは大園中隊のことで、この監獄には浜崎、宮園氏たちが七日ほど宿営していた。建物は平屋建てながら明るくさっぱりとしていて、とても監獄とは思えぬ感じであったという。おそらく出所間近の模範囚が收容されていたのだろう、というのが浜崎氏の所感である。

朱証人は、たぶんこの監獄を見たことがなかったのであろう。だから監獄と聞き、通常の刑務所を想定し、万もの人間が入るものと勘違いし、こうした主張をしたのだろうが、これも現場も確めぬ雑な主張だ。

とにかく何れに信をおくか、一目瞭然たるものがある。隊列の長さがどれくらいになるか、この辺のところはさすが歴戦の士でよく御承知である。それに何故、中国人が中島部隊だと分るのか。日本兵どうしでも、聞かなければ分らないはずだ。

さらに、朱友才証言を続ける。

「夕刻、日本軍の頭目が一声命令をくだすと、道路の両側の藁葺き屋根にガソリンがかけら

れ、火がつけられた。その光の中で軽、重機がいつせいに火をふき、交叉しながら掃射され、たちまちのうちに悲しみ泣き叫ぶ声があった。数里も外に身を隠していてさえ、その声が聞こえた。虐殺の後、江東門は死体が山のように折り重なり、血は流れて河をなした」

これも、鵜飼敏定氏に反証してもらおう。

四、江東門の街には、藁葺き屋根の家など一軒もない。すべて瓦屋根であった。この街は、小さいながら綺麗な街で道路には石畳が敷きつめられていたくらいである。

これもまた、いたって明快な返答である。それに、数里も遠くから見ているというが、そんなに遠くからいったい何が見えるというのか。中国の一里は日本の里、すなわち四キロより少し短いというが、それにしても双眼鏡を使ったとて、そんな動作まで見えようはずがない。まして声など聞こえるわけもない。

しかしながら、この種の証言というのはおおかた、こうしたお粗末なものが多いのだが、こうしたものを証言として子々孫々にまで伝えていったら、むしろ中国側にとって恥となるであろう。

さらに、朱友才証言を続ける。

「翌日、日本侵略軍は輜重<sup>しちゆう</sup>を河向こうに渡すため、あろうことか中国人を河の中に埋めて流れを堰止めようとして、死人であろうと生きている者であろうと見つけ次第河の中に投げこんだ。板橋を固定して杭を打つ時にも、まだ息絶えていない人々の呻き声を耳にすることができた。日本侵略軍は何とこれを中島橋と名付け、大量の戦車、軍用車、騎兵がこの人橋によって江東河を渡った」

また、鵜飼敏定氏にお願いしよう。

五、占領時、江東橋は一部破損していたが、戸板などをのせてすぐ通れるようにした。それに工兵も配属されていたから、そのくらいの修理は簡単にできる。

六、第六師団には、戦車隊は配属されていない。

七、第六師団の輜重はすべて挽馬<sup>ばんば</sup>によつていた。軍用貨物車<sup>トラック</sup>など、これも一台も持っていない。

八、江東橋のところは幹線道路であり広いが、これは両端が行き止まりの短い道路であった。

周囲は湿地帯で、しかも道が細いので、戦車はおろか、自動車なども、江東門までは入れない。砲ですら、担いでいったのだから。

九、死体橋など、物理的にも不可能である。

と、これまた明快である。しかし第六師団に自動車が一台もなかったというのは意外で、中国軍でもかなりの自動車を持っていたのだから、日本の精銳師団ともなれば、当然相当数を持つていたと思ってしまう。

したがって、この朱証人もそう思ったに違いない。それに、何里もの先から見ているという、この一事をもつてしても、はやまともな証言とはいえないが、その上呻き声まで聞いたとなると、もうこれは偽証とか何とかということではなく、ただの大法螺おほぼらとしかいいようがないではないか。とはいえ、そののんきなことばかりも言っているらしい。なにせ日本では、これらの証言の内容までは知らずに最後の「虐殺はあった」とするその部分だけを信じこまされているのだから。それともう一つ理解しがたいことは、江東門街やその周辺の状況が、当時どうであったか、というごく基本的な事実くらい、どうして確かめないのか、ということである。こんな簡単なこともしていないということは、それくらい気楽にでまかせを言った、ということなのであろうか。だがそう気楽に、歴史を歪められたのではたまらない。

江東門で虐殺体を埋めた二つの穴、それが万人坑と呼ばれているものだがさらに、

「上河鎮でも婦女子をふくむ一般市民や俘虜ふりよ二万八千七百三十人を虐殺した」

と、主張している。だがこれも、大藪中隊が大軍を相手に血みどろの戦いをくり展ひろげたところ

である。その時の遺棄屍体は、二千三百。ところがここでもこの数字を一桁<sup>けた</sup>ふやし、さらにそれを少々増加した数字とお見受けした。

だがこの主張する数も、時と場合によつて増えたり減つたりするのも相変わらずだが、その実行日時もこれまた一定せず、南京陥落から翌年の二月までというように、二ヶ月もの長きにわたつて行われたとも主張している。

だが残念なことには、第六師団が城西の地域に駐留していたのは、戦闘終了後の一週間足らずで、十二月の二十日には南の蕪湖方面に転出している。そしてその後には、この地域にはどの部隊も駐留していないのである。つまり殺す人間もいなければ、殺される人間もいなかったということだ。

警備の兵がいなかったのは、この地域一帯は、南京城の城壁上から揚子江までほぼ見通せるのだから、強いて警備の必要もなかったと思われる。つまり平静そのもので、以後何も問題は生じなかつたのである。

それでも虐殺記念館には、虐殺の証<sup>あかし</sup>として人骨が陳列棚に並べられているし、また広大な庭園には、万人坑以下その残虐行為を表現した塑像<sup>そざう</sup>が、延々と続いているのである。

それと、もう一つ留意すべき点をあげておこう。それは湿地帯での戦闘は、いずれも河岸近く

で行なわれている、ということとその四千余の戦死体のうち、多くは流されて揚子江へと入っていった。

ところが地形を見れば一目瞭然だが、揚子江は下関シヤウカンの辺で急に狭くなっている。だからこそ、そこが船の渡し場になっているのだが、それだけに材木でも何でも、浮游物はここで岸へ打ちあげられてしまう。

それに、三叉河さんさ付近がもまた夾江きやうこうと揚子江が合流するところだが、本流の揚子江のほうが流れが強いので、ここも夾江の浮游物が打ちあげられるところだ。

したがってこの下関シヤウカンと三叉河の二ヶ所には、激戦の地から流されてきた多くの戦死体が流れ着くのも当然で、その累々たる屍体を見た者も多い。また写真も日本側の手によって撮とられている。

ところが後年、一部新聞などが大虐殺のキャンペーンを始めたころから、この写真がその証拠とされ、幾度も報道された。また、

「私もそれを見た」

という証言者なる者もあらわれた。だがその実情かくのごとくで、虐殺などとは何の関係もない、戦死体なのである。

ごく最近（平成二年十二月十八日）各社が報じているドイツ外交官が目撃した下関の虐殺死体

なるものもこれで、特に目新しい資料などといえるものではない。

また南の雨花台でも虐殺ありと主張するが、あのような要塞化された地域に、一般市民などい  
るわけもない。ましてそれが二万、三万というのでは、これまた途方もない話としか言いようが  
ないではないか。

とにかく虐殺なるものの内情かくのごとくして、まことに心寒きものを感じる。特に谷師団長処  
刑直後の写真などは、あまりにも生々しく、遺族や関係者のことを思えば、暗澹<sup>あんたん</sup>たる心にならざ  
るをえない。日中友好を志すなら、せめてこの写真をはずすくらいことは、当然あつてしかる  
べきではないか。そしてこの虐殺記念館そのものの撤去を、日本政府は要求すべきである。

最後に象徴的との印象が深い一語をもつて、第六師団のしめくくりとしよう。

鴉飼敏定氏

はじめ私たちは、朝日新聞の虐殺報道などを見ても、あまりにも馬鹿げていて、まともに  
反論する気にはならなかった。しかしあれだけ書きたてると、戦争を知らない人たちは本当  
だと思ふかもしれない。そこで少しづつ発言するようになったんです。

なおこの時第六師団にあつて、終始その報道にあたった大阪毎日の五島広作氏は、『南京作戦

の真相』という著書の中で、

「南京大虐殺は世界史の大嘘」

と、記している。それが、この作戦を見きわめた者の実感なのである。